



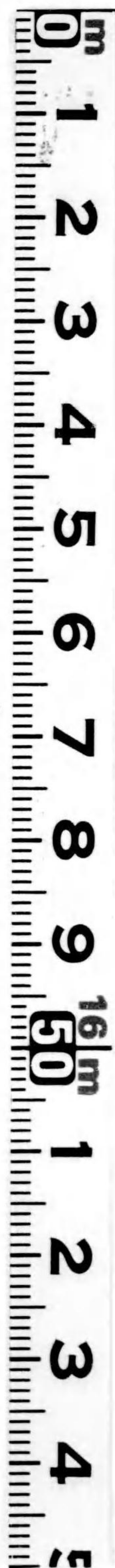
特 100

623

少年文庫

第五編

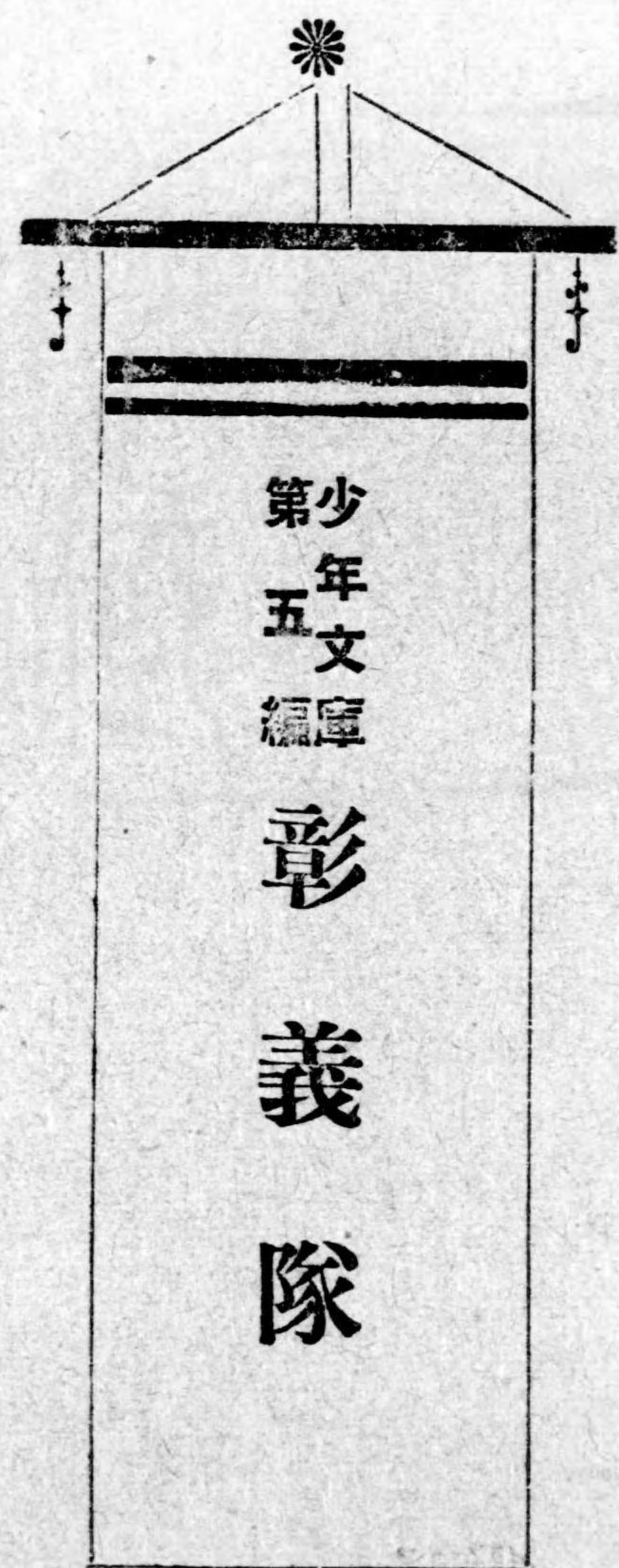
彰義隊



始



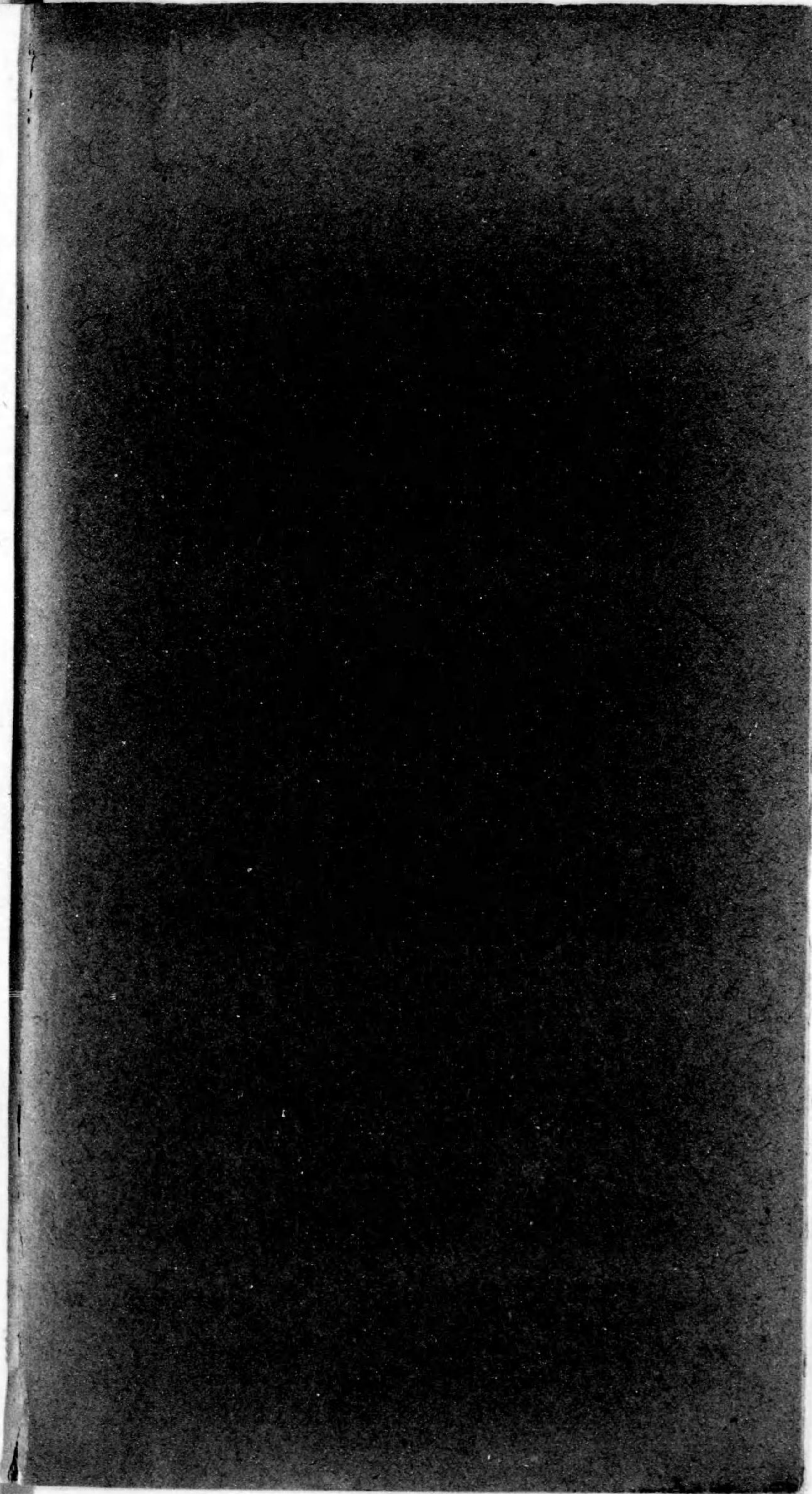
特100
62

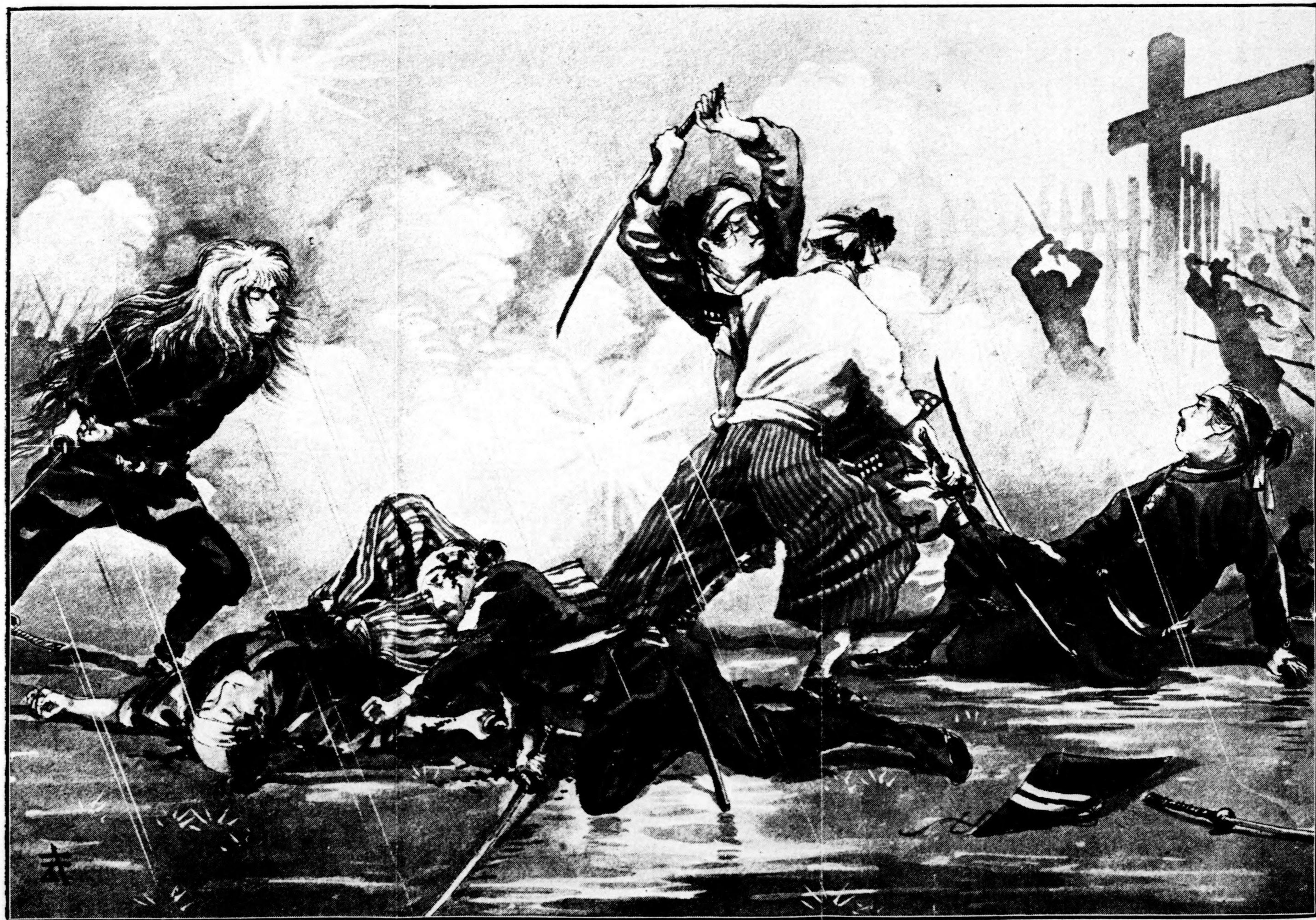


少年
五年
編
彰
義
隊



大正
11.5
印





少年文庫
第五編

彰義隊

國敏著

(一)

或る都會に、石田孝次郎といふ家が有つて、此の家は至つて質素な家で、戸主の孝次郎のお父さんに健介といふお爺さんがあつて、孝次郎の子に淳一と云ふ子が有りました、此子は今高等小學生で、其の下に男の子と女の子とがあります。

お爺さんの健介は、至つて堅くるしい上に、孫可愛がりで、何卒孫の淳一を良い人間にならせたいと一心に思ふて居ます。……といふのは原因がある、此の都會には随分良い兒があつて、學校でのお友だちの中にも、行狀心がけの悪い兒があるから、そんな風が傳染つてはならないと思ふからです。

淳一のお父さんの孝次郎は、家業が忙がしいので、夜になつても淳一に教育になる良い話しをして聞かすことが出来かねますが、お爺さんは隠居の身分で、話して聞かす時間ある上に、孝次郎よりは物を能く知つてますから、毎夜夕御飯が畢むと、彰義隊の話をして聞かせ、淳一の弟や妹にも誰にも、家族一同に聞かせました。

お爺さんは一同に向つて、

祖父「さア皆能く聴きなさい、彰義隊といふのは、明治になつた始にあつたのだ、それで其の事が、明治元年の前の年から起つて居るのだ。……學校で、日本歴史の話を成さるが、彰義隊ばかりの委しい話は聴けまい、彰義の土は、徳川幕府の家來が大勢集まつた隊の名だ、其の幕府が、何で潰れたかと言ふと、御一新の前の、元治元年八月に幕府が長州征伐と云ふて、今の山口縣の地の、長州大名毛利さんを伐つ戦争を始めた、それが一形付いたが又、慶應元年に長州を征伐するので、それ〱他の大名に出兵せよと命じた、薩州の鹿兒島藩へも命じたが、鹿兒島藩は幕府の力が弱つて居るのを見破

つて其の命令を肯かすに出兵するのを辭つて、却つて幕府の敵方の長州藩と聯合した。そこで、先きの見へる賢い士は、幕府が滅れると見て取つて、幕府が滅れない前に、日本の政治をする權を 天皇陛下（これは孝明天皇）へお返し申した方がよからうと思つて、其の事を言ひ立て、土佐の高知の大名の、山内豊信といふ殿様が、それを勧める書面を呈した。

此の時徳川の第十五代將軍慶喜公は京都の二條の城に居たので、多くの家來を召集めて評議をさせたが、先きの見える者は、それ宜しいと賛成したので、將軍も決心して政治の權を 天皇陛下へ還し奉つたこれは明治元年の前年の、慶應三年十月十三日であつた。

時に、朝廷といつて、天皇陛下下付の御公卿様で、岩倉具視と云ふお方があつて、先きが見える英才い人であつた。此の方は朝廷の思召と幕府の心と一致させる主義であつたが、斯様なつたので、思召を變へて幕府を潰す方になり、薩州や長州の士たちと心を協せて「將軍慶喜公は政治の權を御還ししたけれど、それは還したといふ名ばかりだ、將軍と云ふ官の名も位も退けて、將軍が有つて居る領土も取上げて、政治をする仲間に入れないがよい、さうで無ければ、權は其のまま將軍にあつて、朝廷の御政治命令は行はれよまいと曰ひ、十一月の九日に朝廷で大改革を成さつた。

其の大改革と云ふのは、此の時迄の官職を廢して、新に總裁、議

定、參與の三つの職を置いて、有栖川宮熾仁親王を總裁にして、仁和寺宮嘉彰親王、山階宮晃親王、中山忠能、正親町實愛といふお公卿様、山内豊信といふ土佐の殿様、島津忠義といふ薩州の殿様等を議定にして、岩倉具視、小松帶刀といふ薩州の家來、後藤象二郎といふ土佐の家來、木戸準一郎といふ長州の家來たちを參與とした。さうして慶喜公等は仲間に入れられなかつた。

山内豊信侯は此の改革を片手打の仕方と言つて、慶喜公も他の大名の家來も、改革の重役中に入れたら公平だといひ、尾張の殿様の松平慶勝侯と、越前の殿様の松平慶永侯等はこれに賛成した。處が岩倉具視卿は大聲を揚げられて、『徳川氏は代々此の日本を太平に

治めた功は少くないが、嘉永の年以來、天皇の思召に背いて、天皇へ忠誠を盡す公卿や侯伯を幽め、天皇へ忠義を盡す志士を斬殺し、外國人の虚喝に怖れて我儘に條約を結んだ、其の罪は極めて大きい慶喜が果して天皇への忠義心が厚くて、國家を思ふ情が深いならば徒だ政治の權を還し奉るばかりで無くて、將軍といふ官も位も還し奉つて、領分の土地を返納すべき筈だ、さやうな者を今此御大政に與はらせることは出来ない。先づこれに官を退めさせ、領分の土地を納めよと諭し、さうして恭順しくする實を見せたならば、召出して任用けるがよい、若し此の通りにしなれば、罪を露して征討せられよ』といひ、島津忠義侯と安藝の殿様の淺野茂勳侯等はこれ

に同意した。依て此の通りに決した。

此の時徳川慶喜公は京都の二條の城に居たが、幕府が力と恃んで居た京都守護職も所司代なども九日に廢され、再度まで征伐せんとした長州侯は罪を宥されて、其の兵士は續いて京都へ入つて來ることになつたから、直ぐと會津、桑名二藩の兵士を召んで、二條の城を護らせた、其の翌る日の十日に、松平慶勝侯と、慶永侯とが二條の城へ赴つて、前の日の始末を話して、官を退めて領分地を納める内旨を傳へたが、慶喜公は、今直ぐには御受が出来ない。と答へたので、二侯は強て勸めずに歸つた。

此の時に當つて京都は、御所の御門には薩州、長州の兵士が筒口

を開いて、今にも幕府を討てとの命令が下つたならば、我れ一に出發せんと構へて居り、二條の城には會津、桑名の兵が、機あらば撃たうとして居て、實に危ういことであつた。

(二)

十三日に慶喜公は、書面を残し上つて置いて、會津、桑名や幕府の諸吏を引つれて、逃げるやうに大阪城へ退いた。此の事が朝廷へ聞へると、先づ會津、桑名の兵が京都へ入ることを禁じ、慶喜公に單騎で來いと命せられた。さア又これが大阪城内へ傳はると、會津桑名の兵が激つて驚しいことで、朝敵の名を被つても是非が無い。

薩州、長州の兵と戦争しようとなつた。
 そこで又尾張侯と越前侯とが大坂城へ来て慶喜公に、會津、桑名は入京を禁められて居るから、天皇の命令通りに單騎で京都へ參内せよ、萬一異變があれば、我々二人が命にかけて守護致さうと曰つた。此の二人の諸侯は徳川の一門で、親類だからだ。……
 慶喜公はこれを聞いて、御親切忝いと禮を言ひ、そんなら左様に致さうと曰つて二人を京都へ歸したけれども、心の中にはまだ疑ひが晴れなかつた。其の後で、會津侯の松平容保と、桑名侯の松平定敬とが出て「尾張侯や越前侯の曰ふことは、まだ輕々しく信用しては宜けない、今君が京都へ御越しになるなら、臣等が大軍でお

供して、場合によつては薩州、長州の兵を討破り、再び幕府の世に復しませう」と、亂暴なことを言つたものだ。勅命で禁められて居るのも構はずに斯様いふことを言つた。處で慶喜公は、まだ疑つて居るから心が亂れて「然うか、然うしよう」と決心して、會津、桑名の兵を先鋒にして、大軍で京都へ入ることになつた。
 京都へ此のことが知れたので、朝廷では直と薩州藩と長州藩との兵に、鳥羽と伏見とで喰止めさせ、彼れに不都合のあつた場合には撃つと、命令を添へられた。兎角するうち慶喜公の軍が鳥羽、伏見へ來た。薩州、長州の兵は拒んで入れない。會津、桑名の兵から拒む理由を問ふた。すると薩州、長州兵から「入るべからずとの、勅

命だから入れない」と答へた。慶喜公の軍は退かうとも進まうともまだ其の處置を附けないうちに、薩州、長州の兵が、先づ銃砲を射ち出した。ムウ／＼として激つて居る會津、桑名の先鋒兵は、どうして黙つて退くものか、直にこれを射出して戦争が開かれて、慶喜公の軍は賊軍となつた。

銃砲の音、大砲の聲が京都へ聞へる。朝廷では直と仁和寺宮嘉彰親王（後に小松宮殿下）を總督として、錦の御旗を授けて向はせられた。賊軍は御旗を見て驚き恐れて走げて、八幡の附近の橋本に陥止まつた。官軍からは追かけ撃つて橋本を拔り、賊軍は亂れて大阪へ遁げて歸つた。慶喜公も其の夜に、大阪まで逃げて歸つたが、大

阪は止まるべき利の無い土地だから、會津侯容保と桑名侯定敬と、僅の近習家來だけとを従へ、神戸港に碇泊して居る幕府の軍艦の、回陽艦に乗つて江戸へ走げた、これで賊軍は首領を失ひ、勇氣も無くなつて、三人五人づゝ思ひ／＼に落けた。

斯様なつたので、勅命で、慶喜はじめ會津、桑名藩主以下の官も爵も取上げ、有栖川熾仁親王を征東總督として、五畿内諸道の兵を發して江戸を征伐させられた。

慶喜公はじめ味方が敗軍して逃歸つたので、江戸では大騒ぎした幕府には賢い忠義な勝安房守義邦といふ士があつて、此の士は博く物を識つた人で、目先の利く人で、西洋の事情も能く知つて居るか

ら、今列國の形勢を見るに、國の者同士が戦争し合つて居るときでは無い、其の上官軍の勢ひが日々盛んで、幕府は到底滅れることは免れない、今は是非が無いから、賊の名を免れさせ、家が續くやうに盡さなければならぬ。忠義はこれより他は無い』と思つて、登城をして、機を見て慶喜に思ふ所を言つた處、慶喜は大きに喜んで『前きの伏見、鳥羽の戦争は、好いてしたことでは無かつた、勢ひ彼様なことになつたのだ、それに朝敵となつては恐れ多くて、先祖へ對して申譯無い』と曰ひ、義邦はこれに感じて、主人徳川家の末路を全くしたいと決心した。此の勝義邦は、大體 天皇へ忠義な士で、今又主人の徳川家が滅れる際になり、自分は第一 天皇へ忠義

を盡して、次に徳川家を全くしようとしたのだから、却々の骨折であつた。
それから慶喜は、賊となつて居るのに悠々と城の中にも居れないと心付き、恭順しくして居る意を表さうと思ひ、多くの臣下に其のことを曰つて得心させ、慶應四年即ち明治元年の二月の十二日に江戸の城を出て、上野東叡山寛永寺へ入り、左の上奏文を朝廷へ上つた。
此度御追討使御差向あらせらるべきやの趣はるばる承知奉り誠に以て驚き入り奉恐入候次第に御座候右は全く慶喜一身の不束より生じ候事にて天怒に觸れ候段一言の申上様も御座なき次

第に付此上如何様の御沙汰御座候とも聊か遺憾なく奉畏候所
 存にて東叡山に退き謹慎仕り候其段下々へも厚く申諭したとひ
 官軍御差向御座候とも不敬の義等毫末も仕らせざる心得に御座
 候へども弊國の義は四方の士民輻輳の土地に御座候へば多人數中
 には萬一心得違これなきとも難計右邊より恭順の意を取失ひ
 不敬の義等有之節は尙更忍入り奉り候のみならず億兆の生靈塗
 炭の苦を蒙り候様にては實以て忍びざる次第に付何卒官軍御差向
 の義は暫時御猶豫被成下度臣慶喜の一身を罪せられ無罪の生民塗
 炭を免れ候様仕度臣慶喜今日の懇願此事に御座候
 右の趣厚く御諒察被成下前文の次第御聞届あらせられ候様涕

泣奉歎願候此段御奏聞被成下候様奉願上候以上
 此の奏文を上つて置いて上野の寛永寺へ入つて、髪を剃つて僧
 服を着て、一室に閉籠つて謹慎をして居た。此の時、
 國のため民のためとてひとり身を

しのぶが岡にすみ染の袖

といふ歌を詠んだ。將軍は公方様と稱はれ、又、俗では殿下さんと
 稱はれ、日本の政治をして威張つて居たのに、此の様なことになつ
 た。將軍の直家來は却々多くて、諸侯でも譜代の諸侯といふのは皆
 家來で、江戸には旗下といふ家來が八萬騎あつたと云ふのだ。其の
 下に御家人といふのもあつた。其の士等は、主人の家が斯様も衰つ

た有様の見て、どんな感じが發つたらうか。徳川氏が始め三河の國から起つてから、三百年も經つた今まで、恩顧を受けた譜代の士等は悲しくてならなかつたらう。海外の形勢は此の士たちは知らず、錦の御旗の恐れ多いことは知つて居るが、其の實際は薩藩、長藩の所爲で、薩藩、長藩を徳川氏の叛臣だと思ふのに、それ等が錦の御旗の威を借つて、主君を窘しめ、主君には無念なことと思ひながら、我等の爲めに犠牲になつて、閉籠つて罪をお待ちなさる。お氣の毒なことである。これを何うして三河武士の子孫であるものが、じつと見て居られるものか、皆申し合せて、何とかしなけりやなるまいと、言合したやうに誰も思つて居る。そこで二月十七日、四谷

鮫が橋の圓應寺といふ寺院に、歎きに沈んで腹立つて居る者が數十人、集會して、

此度上意の御書付拜見一讀恐惶謹愼罷在候儀篤と勘念仕候へば上様(慶喜)從來尊皇の御忠誠御切實のため君側の奸惡御掃除の御舉動豈圖らんや天怒に觸れ御恭順の御一途片言も御辯解に及ばせられず御伏罪天裁御待遊ばされ候御旨趣臣子の身分如何ともいふべからず一同等閑に存すべからざる儀に御座候これに依て同盟死を決し上様の御成業御冤罪を條陳し闕下に哀訴仕り候外無之と申合せ血誓致し候萬一違犯に及び候は亂世姦雄の謀略に陥り君臣の大義を忘却し賣國偷生の狗鼠に御座候へば天地神人の冥

罰免るべからず候仍而神文如件
といふ申合せ書を作いた。慶喜は此の事を傳へ聞いて、重立つた者何人かを召び寄せて「徳川氏を思ふ厚志は忝いが、此の際に過激な舉動があつては、却つて我が家の不利益を來す」と諭し、最後に泣いて、何んな場合にでも、天皇の御師に敵することあらば、それは予が身に刃を刺すと等じことぞ」と曰つた。召ばれた數人は誰も男泣に泣いて、主君が彼の様に仰せらるれば、何處までも過激の舉動は出來ない。此の上は各自只管身を謹しんで、御家の冤罪を歎願するより外は無いと思ひ、其の趣を答へて、力なく立ち歸つた。

(三)
其の後二十日になつて、復又同じ志の者が、淺草本願寺で集會した。徳川家の家來は誰も主人家が斯様なつたのを歎かない者は無い、口惜しくて堪らない。主人家の事を打集つて相談すると聞くからして、聞傳へて集まり來る者が、遂に五百人許になつた、淺草の本願寺といふのは、淺草から下谷の方へ行く途の、抜け通りが出來る寺院で、東本願寺の江戸出張寺院ぢや。本堂は随分廣い。……此處へ集まつたのぢやが、其の相談の首めに、或る一人が、「斯様團結して組合を作へるのに、第一組合の名が無くてはなりません。そ

れで組合の稱を附けたいが、如何で御座いませうか」と曰つた。これで一同が皆手を叉んで考へた末、阿部弘藏といふ士が、「拙者思ふには、忠義の心を彰すのだから、義を彰すと漢文態に、彰義と書いて、何れ戦争することも有らうから、團結組合を隊として下へ附けて、彰義隊と稱ふては如何で御座らうか」と曰つた。聞く皆々は、いかにも可いと思ふので、言ひ合はした様に異口同音に、「それは可からう」。○「そんなら然う名を附けよう」と曰つて、一座の人が皆それに賛成したので、これで彰義隊といふものが成きた。

江戸の方では斯様であつて、一方の有栖川宮熾仁親王殿下が征東總督で御發途なされた。東征の官軍は威武堂々として東海道から押

し進んで、大總督の宮様はすでに今の静岡の地の駿府へ御着になつた。江戸の方では堪らない。其の堪らないのは彰義隊よりも、此の際に官軍に刃向ふやうな者が有つてはならない。江戸の市中の人民にも安心させたいと、彼れも此れも思ひやる、辨へのある眞實の忠義士の、山岡鐵太郎といふ士が、賢い勝義邦と相談の上、使臣になつて單一騎、馬に乗つて駿府へ来て、參謀部の玄關へかゝつて、「お願ひの筋が御座る」と申し通じた。これを當番兵から奥へ通じた處參謀の西郷吉之助様、後に隆盛と稱つた大西郷さん、これが出て山岡に應接した。鐵太郎は委しく慶喜が恭順しくして居る實情を述べ、

「決して官軍に刃向ひは致しませんから、寛大の御處置を願ひ

ます」と日ふて平身低頭した。これは徳川氏の總代になつて、誠一途で謝罪つたのぢや。人の誠といふものは豪いもので、天にも通じると云ふ位だから大西郷の心に響いた。が、大西郷は至つた人だから、早速には何とも言はない。鐵太郎の風采を、じいツと見たが、鐵太郎の風采が良いので、一目見て感心して、此の人は決して偽つて人を謀るやうな人物で無いと察した。まことに氣の毒なと思つて「諾しい。承諾しました」と快く答へて、官軍から寛大に處らつてやる箇條の數ヶ條を記して示せた。此の他の萬事は更に江戸で協定めるとしたので、鐵太郎は安心して、泣いて喜んで江戸へ歸り、大西郷は直ぐと其の儘馬に乗り、一鞭くれてハイヨー〜。早馬で

以て先陣へ、江戸攻の攻撃を止めに行つた。此の時官軍の先鋒は早江戸の西數里の、池上本門寺へ進んで、此の大寺院に陣を取つて居た。此の將校や兵卒は、明日は江戸城を攻撃するのぢや。それを待つのも今夜一晩ぢや、愉快ぢや〜。勝軍の前祝に、大きに飲もう酒宴しよう。さア皆飲めと杯を擧げて、悦び酒を飲んで居る最中に、宙を飛んで來た大西郷が、「明日の江戸城攻撃は延期した。延べた。撃つことならぬ」と令を傳へた。酒飲んで居た官軍の將卒は、張が抜けたが仕方が無い。これは滞陣と云つて、此の寺院に滞在して居た。さうして置いて大西郷は、江戸の芝の七曲りの、薩藩の上屋敷へ行つて、此邸から使を以て和議の協定

委員に會見うと催促した。

(四)

さア會見うといふ催促が江戸城内へ来た。衆くの徳川家來の中か
らして、協定委員といふ總代人を出さなければならぬ。……處で此
の和議協定委員といふ任は責任が非常に重大に引かへて、一向派
立たぬ引合はぬ任ぢや。……重大と云ふのは、第一に主人家徳川氏
を潰れさゝない事、第二は江戸の市民凡そ百萬人の生命と財産とを
保たせてやらなければならぬ。其の目的を達すると達しないとは
此の委員の技倆一つにあるのだ、實に大切な任だが、只々主人家が

大切とばかり思ひ詰めて、他に智の及ばぬ衆くの徳川家來は、出て
行く委員は官軍と腹合せて、主人家を悪くする者と思ひ違へて、疑
つて賊臣だの奸臣だのと呼び、兇者ぢやと言ふので、誰も好いて此
の割に合はない任に行く者が無い。……忠義が厚ければ、かねて君
に捧げてある命さへ捨てれば、いくら悪く言はれても、そんなこと
は頓着なしに勤まる任ぢやが、多くは命が惜しい方で、これまで威
張つて居た老臣、大身の者は皆辭退して、マア誰様〜と他に譲り
武士の名譽を顯す面白い、男らしい任を厭ひ、どうぞ任が當らなけ
ればよいがと、顔見合せて後込して居る。が、誰が適任らう〜と
評議する衆評で、遂に「勝安房こそ適任であらう。可からう〜」

と曰つて、これに決つた。
 依て直ぐと、この事を勝義邦に傳へた處、義邦は命も構はぬ忠義
 な人だから、今こそ忠義の盡し時と、身を奮り起して皆に向つて、
 『拙者の一命は、疾から主人に捧げて御座るから、水の中でも火の
 中でも、勤めよとの命令は、敢て辭退は致しませぬ。併し、此の大
 命を拜まはる前に、先づ諸士の決心を聞かなければなりません。諸
 士は果して和議協定の全權を、拙者にお任せ下さる御勇氣が御座い
 まするか。若し拙者にお任せ下さるならば、拙者は喜んで命を承
 ります。されども全くお任せ下さらないで、其の條件を見た上で無
 くば決定に従はないと仰しやつては、拙者の參つたは何もなりません

ぬ。左様なことならば、拙者は斷然御辭退申します」と、判然曰つ
 た。……聞いた人たちは皆々一同に、『それは全權を託します萬事
 お任せします。後で彼此申しません』と、固く盟つたものだから
 勝義邦は安心して、此の困難な使命を引受けて、芝の薩藩邸の會見
 所へ赴つた。……赴つたと言へば不安なく赴つたと思はうが、却々
 途中が危険かつたのぢや。義邦が馬に乗つて赴くの、それを疑ふ
 徳川の家來が任して置きながら殺さうとして、鐵砲を射ちかけた者
 もあつたさうぢや。義邦はこれを能く知つて居るので、用心に用心
 をして、鐵砲丸や不意の斬かけを、除けつゝ、赴つたといふこと
 ぢや。

徳川家來が一同に、勝義邦を人撰したのも譯があることで、勝は西洋で海軍のことを習つて歸り、明治維新の前に諸藩から江戸へ傳習うけに行つたものだ。その時大西郷も薩州藩士として學びに行つて、勝の豪い人ぢやといふことを知つて居り、勝も大西郷の勝れたことを知つて居る。それで知人だから可からうと思つたに違ひない又、疑ふ者も知人の中だから、勝が大西郷に抱き込まれて、馴れ合つて主人家を悪くすると僻んだものだ。それで勝を殺さうとしたのだ。……勝は斯様大西郷と親しくて、心も知り合つて居るから、此の日大西郷の好物の鮮を、土橋で買つて其の竹の皮包を、風呂敷に包んで懷中へ入れて持つて行つて、茶を飲んで鮮を食べながら談判

したといふことぢや。豪い人同士は、こんな大事の話をするにも、平氣で沈靜いたものぢや。知つた同士だから疑ひも無し。僻みも無し。畢竟は何方にも無理が無くて譯さへ解れば事は解決のぢや。……さて勝安房が先づ口を開いた。「江戸百萬の生靈を殺すと生かすとは、今こゝに決せられんとして居るが、閣下は徳川氏を滅ぼさうとするか」と。其の曰ふことが、肺腑から出た。すると大西郷が、徐い口調で、「主人の家の後續くやうにしたいと云ふ忠節は、深く余が同情を表する。……萬事領得りました。最早多く言ふのは無用ぢや。……諾しい」これ丈けで協定が出来て了つた、上手な碁打同士の勝負を見て居るやうで、側は解らないが互ひに心と心とで要領

を得て居る。勝はこれで安心して、『閣下が承諾した一諾は、余に於ては、千通の誓書を貰つたよりも重い。結構で御座る。徳川氏の存ると存らないとは、一ら閣下にお任せ致さう。就ては前日にお示しの、山岡が持つて歸つた和議條件數ヶ條は、悉遵奉ります』と曰つた丈けで、勝は暇を告げて歸つた。……人は、誠と誠とが行き遇ふと、こんなものぢや。

勝が歸つてから大西郷は、直ぐに急いで駿府の大總督の本營へ還つて、和議の談判の事狀を總督の宮殿下へ具に申上げて、更に京都へ赴つて上申した。時に京都の朝廷では、總裁、議定、參與の方々が、皆、慶喜を切腹させる論であつたが、大西郷獨りは、それは可

けませんと論じて争つたので、遂に罪一等を減じて、徳川氏は後が續くことになつた。

それから四月の四日に、御勅使の橋本實梁卿と柳原前光卿とが江戸へ下られて、

- 一 城明渡し尾張藩へ相渡すべき事
- 一 軍艦銃砲引渡し申すべく追て相當返下さるべき事
- 一 城内居住の家臣ども城外へ引退き謹慎罷在るべき事
- 一 慶喜謀叛相助け候者重罪たるにより嚴科に處せらるべき處格別の寛典を以て死一等宥さるべき間相當の處置致し言上仕るべき事

但し萬石以上は朝裁を以て御處置せらるべき事
右本月十一日を期し各件處置致すべき様御沙汰に候事
と云ふ御勅旨を傳へられた。……依て四月十一日に江戸の城を明け
渡し、同時に家臣數名を罰して、慶喜は寛永寺を出て常陸の水戸へ
退いた。是になつて朝廷は、慶喜の相續人として、徳川氏の分家の
三卿と云つた田安家の、龜之助と云ふ人に七十萬石を賜はつて、家
を立てさせられた。……龜之助様と云ふのは、今の華族の公爵家の
貴族院議長の徳川家達氏だ。この様に家が滅れなかつたのは、全く
勝安房と大西郷との盡力であつたのぢや。

(五)

慶喜が水戸へ退居するといふことが彰義隊の人々に知れたので、
彰義隊の人々は又集まつて相談した、さうして皆々は、「我々が此
の様に組合つて志を合すのは他では無い、命にかけて主人家へ忠
義を盡さうと思ふ故ぢや、處が今上様(慶喜公)は、水戸へお屏居
になる、それに我々が、江戸に残つて誰に對して忠義を盡すのか、
義を彰すのか。依て上様のお供して水戸へ行つて、御辛苦を共々に
致さう。これに如くことは無いと曰つて、慶喜が水戸へ行く途に待
ち受けてお供を願つた。慶喜の方では有難迷惑であつたので、固く
許さないで、其方等はそれ程迄に我家に對して赤誠を盡してくれ
か。充分満足する。嬉しいぞ。さりながら、予が水戸へ退くのは、

天朝の御命令を畏みて退くのぢや。それなのに、若しも其方等を供
させて随つて行つては、必ず御疑ひを蒙るぞ。さう思ひもよらない
御疑ひを蒙ることあつては、其方等の好意は、却つて仇となつて、
徳川の家は滅くなるにも至るであらう。然うするよりは幸ひと、こ
れに換へて其方等に、力が借りたい一事があるぞ、他では無い上野
東叡山に御座なさる、輪王寺宮を警護し奉ることぢや。官兵が江
戸へ入れば、宮に對していかなる不敬を加へ奉らうも知れないか
ら、予に盡す心を持つて、これから直ぐと上野警衛の任に當つて呉
れよと、諭すやうに命じたが、尙は慶喜の身の上を案じて、強して
供を願つたが、どうしても許されないので、さらばと云うて一同は

暇を告げて上野警衛の任に當つた。これが上野に籠る端になつたの
ぢや。……して見れば宮様をそちのけにして御警衛申さずに、勝手
に官軍と戦争するのは、慶喜の命令の、別段折入つての頼みに背い
た不忠者になつたのぢや。
汝等は日本地理で上野のことを知つて居らう。又、日本歴史で上
野の戦争のことを知つて居らう。併し、彼の書には粗としか記いて
無い。で、其の頃の上野のことを、詳細く話して聞かさう。
そもく上野と云ふ處は、江戸の北方にある一帯の丘陵で、土高
い地で、古しは忍が岡と云つた。何も無い丘陵であつたのを、徳川
氏の初代の家康が、寛永の四年に、天海といふ物識りの僧侶の勧め

に因つて、此の丘陵の上へ、一つの寺院を創めて建て、それを京都の北の比叡山延暦寺に擬へて、東だから東叡山と名を付けて、世々京都から、親王殿下が佛門に御入りなされた法親王を迎へ奉つて座主と申すその御長に御据ゑ申し、又、寺内には徳川氏の廟基を設へて、これを江戸城の鎮護としたのちや。前に慶喜が輪王寺宮と申したのは、其の頃の座主の法親王の御事ちや。この法親王が復飾なされたのが、後の北白川宮能久親王殿下ちや。

其の内の四つの門は丘陵の東の方の下寺通りから坂本へ出る口で、新黒門、車坂門、屏風坂門、坂本門と稱つた。あとの三つの門は、丘陵の西の方から北の方の根津、谷中へ出る口で、稻荷門、清水門、谷中門と稱つた。して黒門の前は一面の廣小路で、忍川といふ小さい流が其の中を東西に横切つて、川には今も存る通り三橋が架つてある。それを俗に三枚橋と稱つて、彼の佐倉宗五郎が駕訴したと云ふ處ぢや。

寛永寺は莊嚴な靈地で猥りに人が入ることを許さなかつた。見るのも眩ゆいばかりで、金碧燦爛たる佛殿は、數知れないほどあつた。其の尤なるものは今の山王臺の清水觀音堂の前に山王社が峙ち、吉

祥閣、忍岡稻荷社と三方に見合つて立ち、黒門から入つて凡そ二町許の處に在る吉祥閣の西北には、大佛殿と鐘樓と對き合ひ、又、吉祥閣の北、一町許の處には、左に常行堂があり、右に法華堂があり、此の二堂の間には複道を架け渡し、其の北の正面には根本中堂があつて、靈元天皇の御震筆の、瑠璃殿といふ額が掲げてあるし堂の前には左に轉輪藏が在り、右に多寶塔が在り、後には輪王寺宮の御殿が在り、これを本坊とも慈眼堂とも稱つた。此等の樓閣は何れも金銀を鏤めた細工だから、見るも眩い位であつたのぢや。彰義隊の各自は本坊に御座る、宮様の警護に行つただけけれども他は其の事實を知らない。官軍に抗ふつもりで上野山内に屯集まつ

たのだと思つて居る。そのことが江戸の外に聞えたから、徳川家へ恩報しようと思ふ者が、我れもくと上野山内へ馳せ集まつた。恰ど大水が流れて下るやうなもので、止め度が無い。五六日の間に二千餘人が集まつた。官軍の方では其の形勢が穩かならなないと見たので、朝旨ぢやぞ。天皇よりの御命令ぢや。解散せよと命じた處が、彰義隊からこれに答へる主意に「主家徳川氏の祖宗の廟の在る地を離れるに忍びませぬ。又、主人家の累代の、大切な寶を保護するので御座る。それも無期限とは申しませぬ。今、人心の靜まるまでは、徳川の爲めに警戒を怠ることは出来ませぬ」と、勝手なことを言つた。官軍たるも

のが、これを何で黙つて聞いて居るものか、遂に撃退けよといふ命令を下されて、大小二十八藩の兵を差向けて、上野を包圍して攻撃させられた。

(六)

彰義隊の方では、これより前に隊伍を部署して、第一から第十八迄の分隊を編制して、戦争の備へを修て居つた。其の各の隊の組頭は、

- 一番隊 土井八郎
- 二番隊 菅沼房次郎
- 三番隊 松本衛太
- 四番隊 鳥居常三郎

- 五番隊 松本 鼎
 - 六番隊 朝川文太郎
 - 七番隊 石川善一郎
 - 八番隊 木下七郎
 - 九番隊 大谷龍太郎
 - 十番隊 高橋真吉
 - 十一番隊 佐久間末次郎
 - 十二番隊 比留間良八
 - 十三番隊 安藤勘造
 - 十四番隊 今井 巖
 - 十五番隊 古谷萬太郎
 - 十六番隊 西村賢八郎
 - 十七番隊 村越三造
 - 十八番隊 山崎雅五郎
- 右の通りで、又、本營は
- 寒松院詰 秋元幸之丞
 - 丸毛利恒
 - 天王寺詰 小川相太郎
 - 花俣錢吉

覺王院詰

加藤大五郎
高山健太郎

記録掛

窪田俊助
小野安太郎

器械掛

阿部弘藏
松崎平三郎

會計掛

飯田豊之丞
百井求之助

右の通りで、尙ほ其の後に馳せ加はつた者を以て、

遊撃隊

騎兵隊

八聯隊

純忠隊

卍字隊

神木隊

松石隊

高勝隊

浩氣隊

旭隊

右の十五隊を編制した。
處が五月十四日になつて、

明日は官軍から包圍いて攻撃するとい

結城隊

寄合隊

ふことが聞えたから、一同は悲しさと憤との涙を揮つて「自分等の望は最早絶果てた、今に及つては順逆や正邪を論じるときでは無い。さア潔く戦争して、主人家の爲めに戦死しよう」と曰つて、互ひに勵まされて、防ぐ戦争の準備に取りかゝつた。

彰義隊は死物狂ひであつた。とても勝てる筈も無し。防ぎおほせることも出来ないことは知れてある。たゞ主人家へ義理立てに、斬り死、暴れ死するだけのことぢや。人は取のぼせると斯様なるものぢや。何いふも相手は官軍だから、心得ちがひを謝罪して、御處分を受ければ、主人家へも忠義になるのだが、斯様なると然うは思ひかへられないものと見える。水戸に居る主人慶喜は嘸氣も揉まれた

ことだらうと思ふ。

さて籠ると言つても城ぢや無し。永く籠れるわけが無い。先づ城構へにしようと思ふと大變ぢや。材木を集めるとしても、これが立木山で柚や木挽が居るので無し。寺内で調ふ有合せの材木を用ゐて丘陵の周圍に柵を設ひ、其の處へ土俵を積み重ねて砲臺の代りにして、塀の代りに壘を寄せかけ、それで銃丸を防ぐことにして、何處から手廻したか、舊砲や四斤砲といふ大砲も備へ付け、隊兵を門ごとに配つて置き、防ぐ用意は出來た。

併し、戦争といふものは、勇氣ばかり強くて勝てるものぢやない。練兵場で兵士が練兵の稽古して、何人も能く揃つて、隊長が號

令を掛けると、腕か指を動かすやうに、思ふ通りに動くのでこそ戦争に勝てるのぢや。彰義隊が敵とする官軍の方では、充分練兵が居いて居る、大小二十八藩の大軍ぢや。それに彰義隊の方は烏合の勢と稱つて寄り集まりの思ひの兵で、練兵も揃つてしてなければ、號令も行はれやせん。儼とした總大將は無い。其の中の天野八郎といふ人や、二三人の士が相談して、適宜に號令するのだから全軍の進退が統一する筈がない。軍器は不足で銃は各自に給らす。大體軍服が揃はなくて、洋服着たのも、容袖衣服に陣羽織のも、撃劍装束で竹鎧きたのもあつて、寄せ雜りぢや。實に氣の毒なものであつた。

淳「お祖父さん。彰義隊は智慧が無いのですか。」
 健介「さうでは無いけれども、主人の家に恩がへしせにやならぬ。口惜しいと云ふ情に晦まされて居るのだから、先ア氣違ひの様ぢや。恩を忘れないのは善いことで、主人の落ち目を口惜しがるのは悪意で無い。善意に違ひないのだが、大體の道理に暗いのぢや。天皇陛下の御師には及向へないものと知つたら直ぐ賢くなるのだが、心を曇らして居るからして、解り易いことが解らない。局外から見ると實に可笑しい。」
 淳「江戸の町の、上野の近い處の人民は逃げましたか」
 健介「逃げたともく、戦争が前の日に知れてあつたので、手に手に

手輕の重寶の物ばかりを、肩に掛けたり脊に負ふたり、腰に着けたりして逃げた。火事なら命に別條ないが、戦争だから流れ丸が飛んで来て命を取られる。明日始まると聞いて居ても、どうして早まるやら知れないから、遠てたの遠てないのぢや無い。さうして上野近邊ばつかりぢやない。どこへ及ぶやら知れないと思ふので、江戸中大さわざぢや、老人は若い者が扶け、男は女が助け、五六日も前から止みどなく雨が降り續いて、往來が田圃か沼の様になつて居る處を、着の身着のまま、右往左往に逃るのだから、衣服は泥に塗れて泣く聲と叫ぶ聲とが入り雜つて、慄として聞いても魂が消える位であつた、平日なら避難所も設けて、焚出して食べさせるのだが、

そんなことは無かつたから、徒安心と思ふ地へ、思ひくりに避難したのぢや。

(七)

淳一は、命知らずの向ふ見ずの軍規の整はぬ彰義隊兵で、僅か二千人の城無し籠城だから、官軍はたい一番の先鋒ぐらゐで攻めると思つて。

淳二「お祖父さん、そんな彰義隊を官軍が全軍で攻めましたか」

健介「尤も全軍二萬八千人で攻めたのさ」

淳二「へー。殆た十五倍の兵力ですなへ」

健介「然うぢや。戦争と云ふものは、自分の味方がいくら衆くても、又、器械萬端整つて敵に勝つて居ても、敵を侮つては敗けるものぢや。……それに又彰義隊は、主人家へ義理立てに、始から命を投出して居る二千人の決死隊ぢや。一人が千人と掛け合ふ位の強さを持つて居る。依て官軍はこれを侮らないのぢや。大西郷が指揮なさつたに間違ひがあるものか。」

汝が學校で日本歴史の話に楠公が初め赤坂城に籠つて、三十萬人の關東勢をば、僅か五百人で惱まして、手初めに敵千何百人と云ふものを殺したことを聞いただらう、楠公の赤坂城兵は忠義に一生懸命で、關東勢は「何に此小城で小勢が」と侮りきつて居る。それで

敗けたのぢや。尤も楠公は小さいながら城に籠つて、智慧謀略に長けて、戦争が上手だから、彰義隊とは同日の論では無いが、彰義隊でも決死隊としては同じことぢやないか。それ故に官軍は侮らすに攻撃しられたのぢや。……戦争ばかりぢや無い。汝等成長して、若し他と勝負を争ふことがあるとき、決して相手を侮つてはならないよ』

淳「解りました。……上野の攻撃と彰義隊の防ぐ戦争とを聞かして下さい」
健介「諾し」。……攻撃の日は明治元年五月十五日で、其の夜の引明に、官軍の軍務官大村益次郎、参謀西郷隆盛の人たちが、諸軍を

部署して上野をば、四方から取圍んで攻めた。表門方面の黒門口へは薩摩、因幡、肥後の諸藩の兵を向け、車坂門口へは阿波、備前彦根、新發田の諸藩の兵。穴稻荷門口へは肥後藩の一隊が不忍池を渡つて押寄せ。根津と團子坂との方面へは長門、肥前、筑後、佐土原の諸藩兵、谷中口へは肥前、筑後の別軍と尾張、津などの諸藩の兵を向けられた。この大小の二十八藩兵で、兵数が二萬八千人であつたのぢや。

これで攻撃になつたが、殊に表門の黒門口は、城とすれば追手門ぢや。攻撃する方も防ぐ方も、両方が第一にこゝに力を盡した。其の激しい戦争は、口にも言へない位の凄じいことで、兩軍が射出す

砲聲は、百千の雷が一時に鳴るやうで、銃砲の音、呐喊の聲が喧しく、耳が聾る位であつた此の時に防ぎ人は、城で無い地で防ぐのだから、周圍に壕も無ければ石垣も、ひめ垣と云ふ塀も無し。壘が手廻つた者だけが、其の壘を重ねて、土俵を組んで持こたへさせて、僅にそれを楯にして戦争して居る。けれども其様な物は何にもならない。弓の矢を射るとき的のやうで、官軍から射つ彈丸が、プス〜と射ち貫いて、見る〜うちにバタバタと、將某仆しに射ち斃されて、血は逆る肉は飛ぶ、骨は碎ける、死にきらない者はウン〜と呻く。射たれる者はキヤアキヤツと叫ぶ。まるで修羅地獄の慘狀で、鶏卵に大石が中るやうなものぢや。邊りの大木には、

肉の塊りが引着いて、其の大木も大砲で、射ち摧かれてメリ〜と。ドシン〜と落つて来て、上野の丘陵は碎けるやうであつた。

黒門を防いで居る彰義隊兵は、殊に決死で防戦して居たが、敵が味方か誰とは知れず「會津勢が官軍の裏切をして、官軍の中を呐喊して、今味方を救ひに来るぞ、それを射つなよ、暫くは發砲するな」と曰ふ者があつた。それで彰義隊は少しく射つのを猶豫つた。此の音の止んだのを機會として、官軍の方では「今ぞ〜」。進め〜。射て〜と號令かけて、いよ〜激しく射撃した。彰義隊は續きに撃たれて亂離粉灰、粉微塵になる境。此の時味方が「黒門破れる〜」

と注意する。これで門内の彰義隊兵は色めく、間もなく門は破れて官軍の兵は潮の寄せるやうに、なだれて入つた。賊將の天野八郎は陣羽織陣笠の装束で、馬上で大音を揚げて「退くな返せ」と曰つて勵ましたが、斯様なつてはもう駄目で、四途路になつて走出す者ばかりぢや。此の時莊嚴な吉祥閣や其の他の樓殿は、廣小路から射つ大砲彈で、射たれて焔々と燃え上り、雨はシト／＼降る最中に、天は爲めに赤くなつた。黒門口が斯様になつたから、其の他の諸門は守る者無しで、自然に官軍が占領した。

つて死なずに、一方の血路を開いて逃げて、今の本所區其の頃の本所石原の知人の家に潜れて居た。が、官軍に探知しられて處分された。

組頭のうちで、寒松院詰であつた丸毛利恒は、戦争の最中に傳令使で、實見したことを筆記して居た。

(前略)予馬を下るに暇なく、馬上より水を掬ひ飲んで僅に渴を醫し、一鞭直ちに谷中口に向ふ。途上行き逢ふ人毎に、黒門を援ふべき旨を傳令して谷中門に至り、同所に在る一隊に告ぐるに、早く山王臺に下り、黒門に迫る敵を狙撃すべき旨を令し、直ちに馬を飛ばして山王臺に上り、手綱を側の樹に繋ぎて戦況を視察す

るに、此方面は最も激戦にして、兩軍の呐喊砲聲は、百千の霹靂の一時に落つるが如し。我兵は互に疊を重ねて土俵を組み、僅に楯としてこれに據るも、宛然矢の的を貫くが如くに、彈丸は之を打抜き、見る／＼算を亂して打墮さる。然れども之を昇き退くに暇なく、屍は基石を散し、が如く、呻き叫ぶ慘状は修羅の巷にさも似たり。見上ぐれば老樹の梢は大砲に打摧かれ、丈餘の枝のめり／＼と音して落來るさまは、恰も山岳の崩るゝかと疑はる、或は霰彈に打ちざられしは誰が肉塊にか、飛んで樹幹に貼付し血痕淋漓たる。其苦戦知るべきなり。予が棄放したる馬も、此にて均しく二彈を受け、屏風を倒すが如く斃れ死しぬ(下略)

と記いてあつたさうぢや。
淳一はこれを聞いて、頻りに上野公園へ行つて見たくなつて、淳二「お祖父さん。上野公園に何ぞ其の痕形がありますか」
健介「有るとも／＼。それを見せる爲めに黒門が二つ存してある。一つの大きな方は、博物館の入口の門で、今一つの小さい方は大佛の後ろに在る。原在つた地は此地ぢやないが、今は此地へ移して据えたものぢや。上野へ行つたら、其の門の扉や門や、柱などに、指頭が入るほどの彈の痕がある。數限りないほどある。それを見て當時のことを想ひ浮べると、慄とするぞよ」
淳一はこれも聞いて、フツと想ひ出したやうに輪王寺宮様のことを聞

かうとする。

淳一「ね。お祖父さん。慶喜公が水戸へ行くとき、氣にかけて居た宮様は、本坊に御在なすつて、戦争最中に如何なさいましたか」

健介「フン」。能く問ふた、今言はうと思ふところぢや。彰義隊は我が事が大事ぢやとて、あのやうに慶喜公から頼まれた宮様を遣れるといふことがあるものか、敗けることは知れてあるから、前日に申し上げて、御立退を願ふべき筈ぢやと思ふ。それとも宮様が御在りなされば、官軍から大砲を射かけられぬ。それが利益ぢやと思つたのか知らぬが、甚だ不敬ぢや。他から不敬せぬやうに、警衛せよと言はれた身が、大不敵をしたものぢや。聞く處が宮様は、大きに

御困りになつて、御近侍數人を従へさせられて、行脚僧に御姿を扱へさせられて、敗けた兵が走るのに紛れて、會津の方へ落ちて行かせられた。落ちるとは逃ることぢや。御いたはしや草鞋を穿して、彼の漬菜で有名な三河島村で、農家で御休息なされて、御心を休めさせられ、雨ふる中を會津へ御發になつたのだと聞いて居る」

(八)

淳一は心の中に、天野八郎は官軍に召捕られて處分されたが、他にまだ生きて居て、今一度事を起さうとする者は有つたか、無かつたかと浮んだので、それも問ひたし、逃げた者は如何なつたかとも思ふか

ら、

淳二「お祖父さん。彰義隊の中で死なずに逃げた者は如何になりましたか」

健介「それは汝、官軍の方から探偵して召捕れるだけ召捕つて處分したよ。若し召捕るときに手向ひした者あれば、それは其の場で斬捨てたのぢや」

淳二「潜れおほせて今一度事を起さうとした者もありましたか」

健介「有つたよ。其の者は多かつたが、事が成らんで止んださうだ。それは其の筈だよ。無理なことでもあり。どうして官軍に勝てるものか、主人の後は七十萬石の諸侯で立つてあるのだもの。有難いと思

つて、恭順しくして居れば可いのぢや」

淳二「徳川氏の多い家來の中には、彰義隊の仲間へ入らずに、慶喜公を見習つて恭順しくして居たものもありますか」

健介「有るともく。其の後官員になつた人も、商人になつた人、工人になつた人がいろくある」

淳二「遠い地へ逃げて行つた人もありますか」

健介「然うぢや」

淳二「主に何地へ逃げてましたか」

健介「フン。會津ぢや、岩代の國の會津ぢや。又、北海道へ行つたのも有らう。(此の頃は北海道を口蝦夷と云つた)

淳二「彰義隊で無くて、お構ひの無い人でも、八百萬石と聞いて居る徳川が、七十萬石になつたら家來は難儀でせう」

健介「然うちや。皆困つたよ。江戸が東京になつてから、旗本衆や御家人であつた方に當時の話を聞くと、『お話も出来ない騒ぎであつた。あれを皆瓦解と曰ひます。全で瓦が落ちて粉碎に破れたやうなものです。難儀をしたが、ヤット先ア商賣人になつて居ます。けれども慣れないことで、士族の商法だから末が案じられる』と曰つて歎息をついて居た。のも有つた。お氣の毒なことぢやつたよ。

お氣の毒と云ふに就て奇らしい話がある。或る何千石かたる旗本の殿さんが、瓦解に遇ふて本職を失なつたので、明治の平民仲間に

入つた。何か商賣しようと考えた處、日用物の食品で、毎日どうでも賣れる安物、さうして小賣主義、とこゝまで浮んだ。志す賣品をいろ／＼書いて、丸めて、念じて取つて見た處が、豆腐屋と記いたのが取れた、何千石取となると家來が多い、此の家來に皆豆腐商を營せた。それで殿様の苗字の上へ豆腐と付けて、何氏豆腐屋と人が渾名を呼けたよ。又一人、同じ位の知行を取つて居た殿様は、家來皆に甘酒屋を營せたので、甘酒何氏と綽名された。

淳一は此處まで聞いたが、彰義隊の他に、江戸城明渡しに反對した者は無いのか？どうかと思ふので、

淳二「お祖父さん。彰義隊の他に徳川氏の爲めに官軍と戦争した人はあ

りませんか』

と問ふた。お祖父さんの健介は、其の熱心に感心して、

健介「淳や。……能く問ふた。豪いぞ。聞いて置いて可いことは、然う

菜種から青蕪まで、問ひ極めなければいけない。……

彰義隊の他にも有つたのぢや。土地と爲ることゝは異ふが、心は彰

義隊と同じことぢや。其の人等は彰義隊が戦争に敗ける前後に江戸

を脱走して、東北の奥羽地方へ逃げた。これは江戸で戦争しては利

が無いと思つたからであらう。

遠い地へ逃げた中でも目立つたのは榎本釜次郎といふ人ぢや。此

の人は徳川幕府の海軍副總裁といふ豪い役ぢやつた。(後に武揚と

稱つた人ぢや。四月の四日に京都から、御勅使二方が江戸へ御下り

で、徳川氏へ傳へられた御勅旨中に、
一軍艦銃砲引渡し申すべく追て相當返下さるべき事

とあるのに、それを奉戴せず、軍艦七隻に乗つたまゝで、品川灣

から安房の沿海へ脱走して、と、北海道の函館へ赴つて五稜廓に據

り、軍艦を御勅旨通りに引渡さない上に、北海道一圓十一ヶ國の地

を徳川へ下されと乞ふたのだ。朝廷でナニ御聞入れになるものか。

不屈きな申し立てあつて、直ぐと五稜廓を御征討になつた。榎本は

根づよう戦争して、幾月も續いたが、つまり降参したのぢや。これ

に加はつた大鳥圭介といふ人は、此の時徳川幕府の歩兵奉行であつ

たが、江戸に居た會津藩士の秋月登之助といふ人と共に、練習隊の歩兵千六百餘人を率れて、下總へ脱走して、上總や上野、下野の間で官軍と戦争して、敗けて奥羽へ走って、一寸困つたときに、倅ひと榎本釜次郎が軍艦で仙臺へ到た。これは逃へ向だと喜んで、それに乗つて従兵も共に北海道へ行つて、榎本の参謀になつて函館五稜廓へ據り、官軍に抵抗して戦争したのちや。これも榎本と同時に降参した。

といふ人、農兵を募集しようとして上野へ行つて、これ等は大鳥と一つになつて官軍と戦争したのちや。此の中大鳥に屬いて仙臺へ行つて、榎本の軍艦に乗せて貰つて函館へ行つて、戦死したのも降参したのもあらう』

淳二「函館五稜廓で降参した人はどうなりましたか」

健介「降参した者は監獄へ入れて禁獄の刑に處した。併し罪の軽い重いに依つて放免された。中にも榎本釜次郎は勅任の高官に用ゐられて大臣にもなつた。大鳥圭介も高官になつた。其の後何方も華族になつて、榎本武揚は子爵、大鳥圭介は男爵を授けられた」

淳二「官軍は江戸の城を受取つて、彰義隊も討平げたから、大軍は江戸

に用はありますまい。何地へ向ひましたか』

健介「フン。奥羽地方へ向つた。會津征伐に向つたんだ。

淳二「徳川氏の新領地の七十萬石の外、朝廷へ御取上になつた土地はとうなりましたか』

健介「其の地に府や縣を置いて、府には知事、縣には令を命じて治められた』

淳二「徳川慶喜公は水戸へ退居せられてから後は如何になりましたか』

健介「ウン。其の後明治二年九月まで謹慎して居られたが、此の月に特に謹慎を免せられて、其の翌る月に新領地の静岡へ移られて、明治十三年は正二位に叙し、二十一年には特旨を以て従一位に叙し、三

十年に東京へ移り、三十三年に麿香間祇候を命せられ、今は東京市の小石川區小日向第六天町に居られる』

もう此の話も大分終になつて来た處が、淳一は偶と勝安房や山岡鐵太郎のことを想ひ出した。彼の様な忠義な大人物は、定めて成行は良からうと思ふたので、

淳二「お祖父さん。勝さんや山岡さんは如何になりましたか』

健介「ア、善いお方だから好くなつたよ。勝様は明治八年の四月に議官に任じて、十七年の七月に伯爵を授けられて華族になつて、二十一年の四月に樞密顧問官に任じ、氷川神社の畔に閑靜に世を氣樂に送つて居られて、三十二年の一月の十九日に患つて、二十一日に逝

られた。此のくらゐの方に御子が無かつた。それで此の二十日、存命(めいぢゆうびやうちゆう)中病中に、慶喜公の第十男(だいじゅうなん)が後嗣(あとつぎ)になつて、勝精(かつきよし)といふのぢや。又、山岡(やまおか)さんの事に就ては大分話(だいぶんわ)がある。明治二年(めいしねん)に静岡縣(しずおかけん)權大參事(ごんたいたんじん)になり、後に茨城縣(いばらきけん)參事(さんじん)に轉(てん)じ、三年(ねん)に肥前(ひぜん)の伊萬里縣(いまりけん)の知事(ちじん)に任(にん)じ、それから侍從(じじゆう)に任(にん)じて先帝(せんてい)に奉侍(ほうじ)した。此の時に大忠義(だいちゆうぎ)があつたのだ。

淳(ちゆん)「お祖父(ぢい)さん。何(なん)です」

健介(けんけい)「明治六年(めいしねん)の三月(ごわつ)に、皇城(くわうじやう)炎上(えんじやう)と日(ひ)つて、天皇(てんのう)陛下(へいか)の皇居(くわうきよ)が火事(かじ)であつた。而も御寢殿(ごしんでん)の近(ちか)い處(ところ)から焼(や)け出(だ)したのぢや。山岡(やまおか)さんの邸(やしき)は淀橋(よどばし)に在(あ)つて皇居(くわうきよ)が火事(かじ)と聞(き)いたから、起(お)きるなり寢衣(ねまき)に袴(はかま)を

着(つ)けて、直(す)ぐと急(いそ)いで驅步(かひはし)で參内(さんない)した。すると火(ひ)が炎(えん)々と熾(さか)んに燃(も)えて居(お)る奥(おく)へ入(はい)らうとした處(ところ)が、御杉戸(おすぎど)の錠(ぢやう)がおりてあつて開(あ)かぬ山岡(やまおか)さんは人並(ひとなみ)勝(か)れて腕力(わんりよく)が強(つよ)いから、ブツンと錠(ぢやう)を毀(こ)して入(はい)つて見(み)ると、天皇(てんのう)陛下(へいか)は火(ひ)を避(よ)けむとして御座(ござ)る。陛下(へいか)は驚(おどろ)いて「鐵(てつ)太郎(たろう)能(よ)くこそ早(はや)く來(き)てくれ」と宣(お)しやつた。もう此(こ)の時(とき)に火(ひ)が近(ちか)づいて居(お)て、御脊(おせな)が火氣(くわつき)で暖(あた)かになつてあつた。それで直(す)ぐに御供(ごこう)奉(ほう)して火(ひ)を避(よ)けたのぢや。此(こ)の誠忠(せいしゆう)に御感(ごかん)じ遊(あそ)ばして、後(のち)は一層(いそう)御信賴(ごしんらい)遊(あそ)ばしたさうぢや。侍從(じじゆう)からは官(くわん)が進(すす)んで、皇后(くわうこう)宮亮(みやうりやう)宮内(みやうない)少輔(せうぼう)に至(いた)り、華族(くわしやく)に列(れつ)して子爵(ししやく)を授(ま)げられ、從三位(じゆうみ)勳(くん)二等(にとう)に叙(じよ)せられた。さうして忠勤(ちゆうきん)して居(お)たが、二十一年(にじゅういちねん)の二月(ごわつ)に病氣(びやうき)に罹(か)つて七

月の十九日に逝られたのぢや。

もう一人大久保一翁と云ふ人があつた。此の人も勝、山岡と共に徳川氏へ忠義を盡し、天皇陛下へも忠義を盡した人であつた。明治の初めに高官に昇つて、永らく東京府知事を勤めた人であつた。

それからもう一人豪い人がある、林董氏ぢや、英國駐劄特命全權公使で、明治三十三年以來、日英同盟の急務を思つて、これに幹旋して見事成立させた人ぢや。これが徳川氏の家來で、函館の五稜廓に籠城して、官軍と戦争した一人ぢや。尤も降参してからは入獄であつたが、免されてから明治四年に、神奈川縣に出仕して、それから工部權大丞、工部權大書記官、參事院員外議官補、宮内大書記官

太政官大書記官、驛遞局長、香川縣知事、兵庫縣知事と進んで二十四年の六月に外務次官に昇り、二十八年に清國駐劄特命全權公使後は露國駐劄特命全權公使、三十三年の二月に英國駐劄特命全權公使、後に外務大臣になり、今は遞信大臣ぢや。尤も華族で子爵を授けられ、位階勳等も高い。

此等の他に、實業で名の揚つたのは中野梧一で、此の人は徳川の家來で、舊は齋藤達吉と稱つた人ぢや。それが故あつて中野梧一と改氏名して、山口縣の縣令になり。後に藤田組の一人になり、已むなく銃砲腹したのぢや。

淳一は是れまで聞いて、彰義隊外の人のことまで知つた。それで上

野のことを思ひ浮べて、

淳「お祖父さん。有難う。よう解りました。今一つ問ひますが、あの

上野公園の彰義隊の墓は何人が建てたのですか」

健介「あれは話した彰義隊の分隊の、天王寺詰の組頭だった小川相太郎
といふ人が興郷と名を改へて存命して居た。此の人が明治十五年に
なりて廣く義捐金を募つて、あのやうに山王臺へ石碑を建てたのち
や。石碑には姑末書が詳しく彫付けてあつて、其の終に詩と和歌と
が一首づゝ録して彫つてある。

昔時布金地 今日草茫茫 誰笑千年後 却憐古戰場

あはれとてたづぬる人もなき魂の

あとを忍の岡の上の塚

と云ふのぢや。又勝安房さんも此の墓へ詣つたとき、

ものゝふのたけびくるひしあゝ消えて

名残に匂ふ山ざくらかな

と詠まれた。

少年文庫 第五編 彰義隊 (終)

少年文庫

6	5	4	3	2	1
白	彰	未	海	出	出
虎	義	刊	國	世	世
隊	隊	兒	男	くら	くら
				べ	べ
				<small>編後</small>	<small>編前</small>
12	11	10	9	8	7
			近		乃
			刊		木
					大
					將

定價 壹冊 金八錢
送料 金二錢

少年文庫

大正元年十月廿五日印刷
大正元年十一月一日發行



編輯者 橘 國 敏
發行者 島 田 幾 藏
印刷者 堀 越 幸
大阪市南區大寶寺町中ノ丁卅二番地
大阪市西區阿波座二番丁一番地

發賣所

全國各書店に販賣す

大阪市南區大寶寺町三丁目 教育書房
東京市神田區今川小路一丁目 修文館
大阪市東區南久太郎町三丁目

定價 金八錢

270
555

終

